

# There 存在構文の本質

— There の機能と定性制約に関する一考察 —

大 森 裕 實

## A Study on the Nature of Existential There Sentence with Special Reference to Function of There and Definiteness Restriction

Yujitsu OHMORI

The aim of the present paper is to explain the function of *there* and the definiteness restriction (DR) advocated by formal syntacticians including Milsark (1979) in relation to English “existential *there*” sentences, so as to reveal the nature of There-Constructions. According to the insight of Bolinger (1977), the function of *there* is referred to as that of bringing something into awareness, of which the present writer inductively approves, judging from an extensive research into real linguistic data. The given linguistic data are, taken into consideration of language registers, collected from four styles such as spoken texts, fiction texts, news texts, and academic texts. The qualitative analysis of the data, as a result, shows in There-Constructions no existence of specifically objective DR that allows no occurrence of nouns with definite articles, demonstratives, possessives, pronouns, and proper names, but there exists functional conditions which characterize post-verbal NPs constituting There-Constructions as “new information” from a communicational/pragmatical point of view. That means the noun concerned labelled as definiteness in formal can be used in There-Constructions conveying some new information to a speaker-hearer in a particular situation. The functional approach to comprehension of the characteristics of English “existential *there*” sentences as in the present article proves to be enough to present

the alternative way of solving complicated language problems which otherwise might not have been fully cleared up by the formal syntactic approach.

## I. 序——いわゆる「There 構文」の文法的定義——

存在を表わす、いわゆる「There 構文」は文頭の *there* のもつその文法的特性から、従来よりさまざまな名称で呼ばれてきた。例えば、Preparatory *there* [Jespersen 1933]; Anticipatory *there* [Curme 1931]; Formal/Introductory *there* [Kruisingha 1932<sup>5</sup>]; Temporary *there* [Quirk 1985]; Existential *there* [Jespersen 1949, Quirk 1985, Declerk 1991, Biber 1999, Breivik 1983] など jargon の品評会の様相を呈している。また、中英語 (ME) や近代英語 (Mod.E) の文法では *expletive* (虚辞) と説明される場合もある (Empty *there* [Jespersen 1949] も同趣旨である)。さらに、伝統文法や構造主義言語学の枠組においては、There 構文は “*There + (aux) + be/other intransitive verbs + noun phrase*” と構造記述される。存在を表わす There 構文の構造記述では、存在の *be* 動詞以外にも、*live / stand / remain / exist / come / arise / enter / be born / happen / take place* などの〈存在〉や〈出現〉を表わす自動詞表現とも共起する。また、*run / walk / amble* といった非能格動詞 (*unergative verb*) も *into the room* のような方向の前置詞句と結合した複合動詞となると〈出現動詞〉となり、There 構文に使われる。加えて、*reach / cross / enter* のような他動詞も場所の目的語を伴って〈出現動詞〉という複合動詞を形成し (例えば、*reached his ear / entered the room / crossed his mind*)、There 構文で使われる [安藤 2005: 763-764]。

There 構文における「主語」が何かということになると、文頭の *there* は次の4つの点で一応「主語」と認定することはできる(① Interrogative の場合の倒置: *Is there anything in the box?*; ② Tag Question の形成: *There is a book in the box, isn't there?*; ③ Negative Sentence の形成: *There isn't anyone in the room.*; ④ Insertion of AUX の位置: *There might be someone in the room.*)。しかし、“*There are lots of people in the hall*” のように、*there* に続く主動詞 *be* が後続の名詞句の数に一致して複数形をとることから、文頭の *there* を「形式主語」とし、後続の名詞

句を「概念的主語（眞主語）」として分析することも広く行なわれている。この概念的範疇と形式的範疇の齟齬（ズレ）を説明するために、上述のような多くの術語（terminology）が諸文法家により使用されてきたのだと言い換えてもよい。

そもそも、歴史的には、存在を表わす There 構文の文頭の *there* は、場所を示す副詞（内容語）から発達して、固有の語義をもたない機能語へと文法化したと考えられる。現代英語の There 構文と同様の性格をもった存在構文の萌芽が古英語（OE）に看取される [Quirk 1951, 中尾・児馬 1990]。

*Ʒær wæs sang ond swēg samod ætgædere* (Beowulf, l.1063)  
 “there was song and music together”

また、中英語（ME）を代表する Chaucer's *Canterbury Tales* にもかなり見受けられるが [MED]、当該 *ther* が虚辞なのか副詞なのかの区別は必ずしも明瞭ではない [藤原 2001]。

A Knyght *ther* was, and that a worthy man (CT General Prologue, l. 43)  
 “there was a knight, and (he was) a brave man”

That in hir coppe *ther* was no ferthyng sene (ibid., l. 134)  
 “that in her cup there was seen not a very small portion of grease”

同時に、それは場所を示す副詞の *there* と共起できることから証左される (eg. *There's still no water there.* [Biber 1999: 944])。存在を表わす There 構文の機能語 *there* は次の3点で内容語 *there* とは異なる〔①音声面からは、通常、弱形の /ðə(r)/ となること；②語彙面からは、場所を表わす本義を消失していること；③統語面からは、副詞相当語句としてではなく、文法的主語として機能すること〕 [ibid.: 944]。

さらに加えて、存在を表わす There 構文には重要な統語制約が課せられており、それが伝統文法や形式文法でも繰り返し強調される点である。すなわち、There 構文において、動詞に後続する名詞句には定性 (definiteness) をもつものは許さないとする「定性制約 (Definiteness Restriction)」(以下 DR) の履行である。一般的に、定性をもつ名詞句とは、①定冠詞を伴う場合：\*There is the cat on the sofa；②代名詞の場合：\*There's him in the room；③指示詞を伴う場合：\*There is that cat on the sofa；④所有形を伴う場合：\*There is John's cat on the sofa；⑤固有名詞の場合：\*There is John on the sofa. などであると規定

される[荒木・安井 1992: 501]。しかし、日常的言語活動という経験則から判断する限り、存在を表わす *There* 構文に定冠詞を伴った名詞句が使われることも事実であるから (eg. *There must be the ability to do so right away.*)、定冠詞や代名詞の有無だけで *There* 構文の正否が自動的に決定されるわけではない。

そこで本論考では、存在を表わす *There* 構文を理解するうえで重要な要因に検討を加え、当該構文の本質に迫ろうと試みる。すなわち、文頭 *there* の機能に関する脈絡 (context) 重視型に拠る理解と、それに連動して惹起する *There* 構文形成にとって不可欠であると考えられてきた統語制約としての「定性制約」(DR) の有無についての問題を追求する。換言すれば、DR は本当に存在するのか、また存在するとすれば、その場合の DR の本質とは何か、さらには DR を働かせる心理的原理とはいったいどのようなものかという一連の疑問に対して、形式文法的観点からでは説明不十分な側面に焦点をあて、実例データに基づいた質的分析を行なうことにより、機能主義的観点から実証的に明らかにする。

## II. 存在を表わす *There* 構文に関わる先行研究に看取できる言語的洞察

### II-1. Curme (1931)

カーム (George Oliver Curme) は、伝統文法の枠組において、欧州の泰斗イエスベルセン (Jens Otto Harry Jespersen) と文法観において対峙した米国のゲルマン語学者として知られているが、意味を重視した機能主義的アプローチの魁を著書 *Syntax* (1931) のなかで展開したといつてよい。カームが形式よりも意味に重点をおいた姿勢は、現代英語における4格(主格・対格・与格・属格)や相 (aspect) の認定によく表われているが、*There* 構文についても同様である。

カームに拠れば、*there* は *it* と同様の性質をもつ「予期の *there*」(anticipatory *there*) と規定され、主部を強調したい時に、それを出すのをしばらく控えて、未決で気をもませる効果 (the feeling of suspense) があるという (eg. *There once lived in this house an interesting old man.*) [Curme 1931: 9-12]。つまり、「ほら、こんなものがありますよ」と相手の心に対して事前に予告通知する機能を *there* が担っているという

ことであり、ある趣の心理的効果を伴った非人称主語 (impersonal subject *there*) ということになる。テーマ (theme) / レーマ (rheme) といった情報構造的な概念の確立しない時代にあつて、There 構文の *there* の性格について、現時点からみても遜色なく、簡にして要を得た解説を施していることは注目に値する<sup>1)</sup>。

## II-2. Bolinger (1977)

ボリンジャー (Dwight LeMerton Bolinger) は、構造主義言語学に続いて生成 (変形) 文法の席捲した米国言語学界にあつて、「形式が変われば意味も変わる (形式の数だけ意味がある)」とする意味重視の独自の立場の言語観を *Meaning and Form* (1977) でまとめたが、そのなかで、チョムスキー (Noam Chomsky) の改訂拡大標準理論で提示された「名詞句後置 (NP Postposing) に続く there 挿入 (There Insertion)」という変形適用による存在文の派生については、「統語だけを考慮したものであつて、意味を考慮したものではない」と論断する [Bolinger 1977: 90-123]。

ボリンジャーに拠れば、There 構文の *there* は虚語でも余剰語でもなく、十分に機能語としての役割を果たしていることは、*there* を伴わない文と比較対照してみれば明らかであると指摘される。例えば、“Across the street is a grocery” と “Across the street *there's* a grocery” [ibid.: 93] では、前者が直接的に何かを提示する (目の前にある雑貨店について言及する) のに対して、後者では我々の意識に何かを提示する (「ほら、そういえば通りを渡ったところにあつたでしょう、雑貨店が」)。この機能は、“\*As I recall, across the street is a grocery” が文法的非文であり、“As you can see, across the street is a grocery” と “As I recall, across the street *there's* a grocery” が文法的正文であることを説明するものである。すなわち、それは「提示的機能 (presentative function)」に他ならず、次のような心理的機能を意味している: [*there*] ‘brings something into awareness’, where ‘brings into’ is the contribution of the position of *there* and other locational adverbs, and ‘awareness’ is the contribution of *there* itself [ibid.: 92-93]。

つまり、ボリンジャーが指摘する There 構文の存在の *there* の本質は、その〈意味〉において、場所の there の延長線上にあり、「一般化された (抽

象化された) 場所」を示すものであると同時に、その〈機能〉において「何かを(聞き手の)意識にのぼらせる」役割を担うものとして要約できる。それは、次のような言語事例からも明らかである。“I’m surprised she hasn’t let him long before this.—There are the children—remember?” [ibid.: 115]。

### II-3. Milsark (1977, 1979)

ミルサーク (Gary Milsark) は、ポリンジャーとは対照的に “there 挿入 (There Insertion)” を本質的に是認はするが、その場合に幾多の統語制約が必要になると指摘し、その中心をなす「定性制約」(DR) に着目する。一般的に、“There is a wolf at the door” と “\*There is the wolf at the door” の文法的正非を決定する要因は DR にあり、それは定式化すると CONDITION: 2 must be [-definite] (この場合の 2 は There 構文の SA: X NP Y be Z の NP を指す) となる [Milsark 1977: 4]。しかし、そもそも定性 (definiteness) の定義が不十分であるから、この条件では次のような反証例の産出を防ぐことができないという [Milsark 1979: 18] :

① “Nobody around here is worth talking to ... Well, there’s John, the duck salesman” ; ② “There’s \*a/the same plaster duck in the garden that there was ten years ago” (crypto-indefiniteness NP : 明示的には定性表現の語句ではあるが、意味の点からは定性が不明瞭である類型) ; ③ “There is a best theory” (明示的には不定性表現の語句ではあるが、意味の点からは定性表現に等しい類型)。

それでは、There 構文において DR が排除する NP とはいったい何であり、排除しない NP とはいったい何かが問われることになるが、ミルサークは次のように “定性の強弱” が決定要因になるという [Milsark 1977: 8 // 1979: 195]。定性が強く排除される類型としては、一般に指摘されるように「限定」を表わすもの : the / demonstratives / pronouns / possessive DETs : “\*There is the dog/that dog/John/him/John’s dog in the room” と、「全称」を表わすもの (universal quantifier 附の NP) : all / every / each / any (some の対極用法の場合) : “\*There are all dogs/both dogs in the room” “\*There is every dog/each dog in the room” “\*There is anything John would do for you” の二種が分類される。また、定性が弱く容認される類型としては、「不定」を表わすもの : a(n) / sm

(some の弱形) / number determiners / plural & mass determiners (全称的でないもの)とされる。すなわち、DR の特性に「全称性制約(Universal Restriction)」(UR)を加えて修正した点に特徴がある。

#### II-4. Rando & Napoli (1978)

ランドー&ナポリ (Emily Rando & Donna Jo Napoli) は、いわゆる There 構文には「存在文」と「リスト文」の二種類があるが、その本質は一つであると指摘する。「存在文」には(典型的には)「不定」の NP しか共起できないのに対して、「リスト文」では「定」「不定」のどちらの NP も許される。例えば、“What’s worth visiting here?—There’s the park, a very nice restaurant, and the library. That’s all as far as I’m concerned” [Rando & Napoli 1978: 300-301] や “My God! How many people know about this?—There’s me and there’s you. That’s all” [ibid.: 308] では「定性」をもつ一般名詞や人称代名詞が用いられているが、これははっきとした正用法の There 構文である<sup>2)</sup>。

これらの事例から判断して、There 構文に生起できる NP の特性は “nonanaphoric” (前方照応的でないもの) というキーワードで括ることができるといふ言語的洞察が得られる。

#### II-5. Holmback (1984)

ホルムバック (Heather Holmback) は、ミルサークにより定式化された「定性制約」(DR) / 「定性効果」(Definiteness Effect: DE) では There 構文について統語的に十分な説明を与えることができないと指摘する (eg. There is the right proportion of men to women in this bar; There was the most beautiful woman I had ever seen at the party; There is the man that I told you about yesterday in the garden [Holmback 1984: 200])。この問題を解決するために“inclusiveness” (包括性) という概念を導入し、There 構文に定性をもつ NP が共起する場合には、「包括条件」(inclusive condition) が必ず働くと規定する。ここで提起された「包括性」とは、基本的にはホーキンスが定冠詞分析の際に採用した術語であり (J. Hawkins, *Definiteness and Indefiniteness* (1978))、談話の場面において(語用論的に)話し手と聞き手が共有する実体に関連する記述を充足させるような事物に対する言及(照会)のことである。これを敷衍すれば、コ

コミュニケーション活動であればいかなる場合でも、話し手と聞き手が共有する情報は必ずいくらか存在するということである。そして、それらは談話の行なわれる状況あるいは過去に関して共有する経験・憶説・信念についての知識、それまでに相手とのことばのやり取りから得られた知識、話し手と聞き手が共有できる知識や気づきからの情報であれば何であれ含まれる [ibid.: 203-204]。

端的に言えば、包括性をもつ There 構文とは、話し手と聞き手が共有するセットのなかで、語用論的に特定の事物に指示対象を特定化できる構文であるということができる。

## II-6. 鈴木 (1977)

鈴木英一に拠れば、存在を表わす There 構文に共起できる真主語名詞句は「後方照応的定名詞句」に限るということになる。

ここでいう「後方照応的定名詞句」とは「前置詞 of + 名詞」「関係節を伴う名詞句」「同格節を伴う名詞句」「一定の前置修飾語を伴う名詞句 (最上級表現や only などの限定表現)」を意味する。前方照応的定名詞句や外界照応的定名詞句は There 存在構文に生起する前に、先行文や外界において、それと同一指示的名詞句や指示物が存在する。すなわち、それらは referential function をもち、既出要素を指示するため、旧情報を担うことになり、There 存在構文の真主語となることはできない。

## II-7. Takami (1992)

高見健一 (Ken'ichi Takami) の分析は、基本的には外置構文の可否についてである。“A man is here who is carrying a large package” や “A picture is hanging on the wall of John F. Kennedy” という外置構文は文法的正文だが、“\*The man is here ...” や “\*The picture is hanging ...” は文法的非文である。この外置には “Identifiability Condition for Extraposition from NP” が関与している。“Extraposition from NP is possible only when the associated NP itself is not identified.” [Takami 1992: 111]。この制約は、外置される節句を含む名詞句全体が新情報を伝えなければならないということの意味する。この場合、容認される不定名詞句による指示物はまだ同定化されておらず、後続の外置節句がそれを同定するため、“後方照応的名詞句” だということができる。そしてそれは「外





Factor(s)?

- J. S. Johnson & E. L. Newport (1989) Critical Period Effects in Second Language Learning.
- R. M. DeKeyser (2000) The Robustness of Critical Period Effects in Second Language Acquisition.
- E. Bialystok & K. Hakuta (1999) Confounded Age: Linguistic and Cognitive Factors in Age Differences for SLA.
- Th. Bongaerts, B. Planken & E. Schils (1995) Can Late Starters Attain a Native Accent in a Foreign Language?
- S. H. Marinova-Todd, D. B. Marshall & C. E. Show (2000) Three Misconceptions about Age and L2 Learning.
- M. P. Garcia Mayo (2003) Age, Length of Exposures and Grammaticality Judgements in the Acquisition of English as a Foreign Language.
- D. Birdsong (1999) Introduction: Whys and Why Nots of the CPH for SLA.

### III-2. 調査結果と全体的分析

Table 1. 4種類の文体における There 構文の出現率と定・不定名詞句の生起数

	Indefinite	Definite	総行数 総語数	There 構文 出現率 (Per MIL)	BNC (Per MIL)
Spoken Text	768	19	約 15,000 約 300,000	約 5 % 2560 63.3	Indef. vs. Def. 124.5 13.3
Fiction Text	728	16	約 19,000 約 228,000	約 4 % 3193 70.2	Indef. vs. Def. 42.4 3.9
News Text	409	19	約 3,500 約 42,000	約 12 % 9738 452.4	Indef. vs. Def. 121.6 10.5
Academic Text	146	03	約 7,200 約 86,400	約 2 % 1690 34.7	Indef. vs. Def. 240.6 28.3

本表に記載された各欄 1 行目の単位を伴わない数字は文の数を表わす。従って、There 構文出現率は総行数に対する There 構文行数の出現率を意味している。また、(Per MIL) は 100 万語に対する目標表現数を表わす。There 構文出現率の縦列の左右の数字は、全体像を概観する参考とした BNC (British National Corpus) における「不定」・「定」の数と比較対照を容易にするために、敢えて語数換算したものである。

なお、DR の性質に特化して調査を進めるため、表層的には There 構文の形をとる「リスト文」(list sentence) (eg. *There's the park, a very nice restaurant, and the library.*) は特異形〔「提示文」(presentational sentence) の典型例 [荒木・安井 1992: 822]〕として、本表における「定」(Definite) には含まれてはいない<sup>3)</sup>。ここでは、DR に焦点化するため、存在を表わす There 構文を、新旧情報から成る「叙述文」(predicational sentence) であると考えて、言語資料を整理した。

また、BNC データは<sup>4)</sup>、あくまでも全体的傾向を量的分析から把握できるかどうかの参考として、there + is + a と there + is + the の生起する構文について単純検索したものであり、非目標文も含む数字であることに留意が必要である。サンプリングから得られる 100 万語に対する There 構文出現率についても、本執筆者のデータとの間にかかなりの齟齬が見受けられることから、大規模な言語コーパスに基づく単純な量的分析を盲信することはできない。伝統文法的手法に回帰するわけではないが、結局のところ、研究者がみずから蒐集した事例とその質的分析が問われるということであろう。言語コーパスに基づく「鳥の眼」と自身の蒐集事例に基づく「虫の眼」のバランス感覚が言語現象を見極める際に不可欠であることを示唆している。

今回蒐集した言語データからは、存在を表わす There 構文は一般に考えられるほどには頻度高く通常の英語散文に現われるわけではないという事実が認められる [Spoken Text: 5%; Fiction Text: 4%; News Text: 12%; Academic Text: 2%]。それは、情報構造という観点から判断すると、旧情報をテーマとして「主部」に据え、新情報をレーマとして「述部」に置くという無標形の文構造に対して、有標形の There 構文を使用しなければならぬ特別な脈絡 (context) が多くはないということに起因するのではないか。事実、英語には、存在を表わす形式には There 構文以外にも、“無生物主語 + have” を使った文形式や“人称代名詞 + have” を使った

文形式があり (eg. *There is a big TV station in this city; This city has a big TV station; We have a big TV station*)、その選択肢の多様性にも起因すると考えられる。

さらに、文体的特徴についても、Table 1の第1段と第2段に提示されたように、口語散文体と文語散文体との間に差異は、「定」「不定」の出現比率も含めて、ほとんど看取できない〔Spoken Text: 1/40; Fiction Text: 1/43; News Text: 1/22; Academic Text: 1/49〕。There 構文に関する限り、現代英語の日常文体における言文一致は明らかに進んでいる。ただし、今回選定した文語散文体のテキストが会話体を比較的多数含むものであることも考慮する必要はある。

特筆すべきは、Table 1の第3段に提示された News Text であり、そこにはジャーナリズム特有の文体的特徴がよく現われ、他の文体に比較して2倍から3倍の There 構文出現率を示す。「定」の出現率も他の文体の2倍を超える。報道という観点から、当該コンテキストに即して読者を十分に意識し、There 構文を採用した新情報の提示方法に特徴があることが窺える。

### III-3. 定性制約 (DR) に特化した調査結果と個別的分析

前節で蒐集した「定」を伴った存在を表わす There 構文の特性についてさらに分析を進めるために、Table 1で提示した19例〔Spoken Text〕、16例〔Fiction Text〕、19例〔News Text〕、3例〔Academic Text〕に関して、「定性」(Definiteness) の特徴に基づいて類型化したところ、Table 2に示すような5類型が認められた。

Table 2. 4種類の文体における There 構文に生起する定名詞句の類型

	I	II	III	IV	V
Spoken Text	11	5	0	2	1
Fiction Text	11	1	1	1	2
News Text	19	0	0	0	0
Academic Text	03	0	0	0	0

ここでの5類型とは次のような「定性」の性質をもつものをいう。

(1) 後方照応型 (Cataphoric Reference) : 指示対象が、後続する文脈からの情報に基づいて決定される場合 (eg. *The coat you gave me isn't*

mine after all.)。

[採集データからの実例] (※この類型は数が多いので、それぞれの文体から各3例ずつに留める；下線部 NP が reference する箇所を [ ] で示した)

- 1) There's this incredibly unique opportunity [to travel around the country and listen to people and have conversation with people about the things they care about and what their needs are].  
(Spoken: LKL, July 26)
- 2) then there must be the ability [to do so right away], and why aren't we doing that.  
(Spoken: LKL, July 30)
- 3) there is the record [of the past three and a half years, which I think many will argue is not a moderate record]. (Spoken: LKL, August 30)
- 4) See, there was this wizard [who went ... bad. As bad as you could go].  
(Fiction: ① HP, p. 45)
- 5) There was the sound [of five noses being blown].  
(Fiction: ③ HP, p. 155)
- 6) For a while there was the continual creak and rustle [of leaves as they tried for comfort].  
(Fiction: ④ LF, p. 149)
- 7) There is the threat [of serious clashes between various factions of our political spectrum which threaten to be alarmingly close to a blood-bath].  
(News: GW, no.13, p. 4)
- 8) There's the possibility [that it's because they've got bad memories].  
(News: GW, no.14, p. 21)
- 9) there is the voice [of the child who, 50 years later, still cries out for his dead mother].  
(News: GW, no.14, p. 25)
- 10) there is the possibility ['that the adult learners assessed ... were poorly selected and do not represent highly proficient adult bilinguals'].  
(Academic: Singleton, p. 13)
- 11) There is the nature [of the relationship between age of arrival and performance:] ...  
(Academic: Johnson & Newport, p. 97)
- 12) There is also the pattern [of errors found for the wide range of aspects syntax and morphology of English studies:]  
(Academic: Johnson & Newport, p. 97)

(II) 前方照応型 (Anaphoric Reference) : 指示対象が、先行する文脈からの情報に基づいて決定される場合 (eg. John bought a TV and a radio, but he returned *the radio*.)。

[採集データからの実例] (※下線部 NP が reference する箇所を [ ] で示した)

- 13) ... And by far the vast majority of people who come out [to wave are doing so in a friendly fashion]. Although occasionally there is the not-so-friendly wave. (Spoken: LKL, August 12)
- 14) KING: I mean 29 to 17 – you had to say, I must [feel a little weird] ... —INGRAM: [It absolutely felt weird. For the whole of the 10 months that I was his teacher, and he was my student], there was this extreme cognitive dissidents going on. (Spoken: LKL, August 25)
- 15) Many people like sports. They like watching people compete. They like seeing people rise to the occasion, so that's [that part of it]. And then there's the big part of it is the disgusting stuff, you know, the sick stuff. (Spoken: LKL, August 26)
- 16) KING: So were you all in [different parts of the dungeon]? So to speak? I mean how was this set up?— KIRSTEN: Well, when I was first taken, since I was the first one, there wasn't the dungeon. (Spoken: LKL, August 27)
- 17) I think [by Labor Day you're really going to kick off on the issues and there are issues out there that separate the two candidates]. There's always this talk every four years. (Spoken: LKL, August 29)
- 18) And then, once you had managed to find [them], there were the lessons themselves. (Fiction: ① HP, p. 99)

(III) 外界照応型 (Exophoric Reference) : 発話場面など話し手と聞き手を取り巻く状況・環境からの情報で指示対象が認知可能な場合 (eg. Will you pass me *the butter*, please?).

[採集データからの実例]

- 19) There was that- that bloody dance. There was lightning and thunder and rain. We was [*sic*] scared. (Fiction: ④ LF, p. 142)

※この文は、彼らが昨晚見たという bloody dance について話している場面に出現。

(IV) 一般的知識・普遍的眞理型 (General Knowledge) : 指示対象の認

知が、話し手と聞き手が共有する、より広い知識体系に基づいて行なわれる場合 (eg. *the sun, the moon, the equator, the President*).

[採集データからの実例]

20) I say to them tonight, there's not a liberal America and a conservative America: there's the United States of America. (Spoken: LKL, July 27)

21) And in addition, beyond that, there will be that Steven Spielberg produced video. That nine-minute biographical film.

(Spoken: LKL, July 29)

22) And there's the Keeper, too. (Fiction: ② HP, p. 83)

(V) 論理的予測型 (Logical Inference) : 語の意味から論理的に指示対象の唯一性が推論される場合 (eg. *When is the first flight to Chicago tomorrow?; This is the only remaining copy.; Of the three newspapers we have in this city, this is the best.*).

[採集データからの実例]

23) I guess the most famous zoologist there is. (Spoken: LKL, August 17)

24) There wasn't the faintest trace of writing on any of them.

(Fiction: ② HP, p. 173)

25) There was only the faintest indication of a trail here.

(Fiction: ④ LF, p. 44)

### 【分析】

(1) 第I類型に看取できるように、「後方照応型」のNPの「定性」は後続の情報を基に規定されるだけであって、当該の脈絡に導入される時には機能的に「新情報」を担っている。しかし、後続の関係詞that節や不変化詞of/to-節によって修飾されているために、統語的には定冠詞附のNPとなる。すなわち、“definite in form, but indefinite in meaning”と表現してもよい。英語の表現形式に鑑みると、「定」を伴うThere構文がこの類型に圧倒的に集中するのも首肯できる。鈴木(1977)を支持するものといえる。

(2) 上掲第(1)項目で指摘したことは、第V類型「論理的予測型」にも同様にあてはまる。採集データの23/24/25はいずれも最上級表現であり、統語的には定冠詞附NPとなるが、当該脈絡においては「新情報」を担うNPである。鈴木(1977)ではこれも後方照応的定名詞句と規定される。

(3) 第Ⅱ類型から看取できることは、「前方照応型」の「定性」をもつ NP については、聞き手がその指示される対象を(直近の)文脈や場面から既に知っていることを示唆する。それにもかかわらず、話し手は聞き手がそれを忘れてしまったと判断したり、或いは再度強調する必要があると判断して、There 構文において使用される場合である。換言すれば、話し手が旧情報をあたかも(擬似)新情報として改めて導入する機能、すなわち、改めて聞き手の意識にのぼらせる機能“bring something back into awareness of the hearer” [Bolinger 1977: 115] を果たしていると指摘できる。

また、これが口語的表現の特徴であることを上掲の言語事例が示唆している<sup>5)</sup>。

(4) 第Ⅲ類型「外界照応型」と第Ⅳ類型「一般知識型」についても、究極的には第Ⅱ類型と同様のことが指摘できる。第Ⅱ類型の「前方照応型」が NP の指示対象について明示的 (overtly) に示すのとは対照的に、第Ⅲ・Ⅳ類型は暗示的 (covertly) に示す差異があるということに過ぎない。ここでも、機能について通底するキーワード(ひと言で核心をつく言辭)は“bring something (back) into awareness”である。

## 【結論】

以上の調査結果とその分析から、次のことが導かれる。

(1) たとえ“形”が「定」であっても、当該脈絡において“意味”が「不定」ならば、There 構文の主動詞の後 (post-verbal position) に“定性をもつ NP” (definite NP) は、規範文法や伝統文法の枠から逸脱して、今まで指摘されてきた範囲よりもかなり自由に現われる。この言語事実から、ミルサークの掲げる DR の定式の CONDITION を“Functional Condition” [-definite in notion] に修正すべきであり、そのことにより、言語機能を視野に含めた統語制約を正確に示すことができると考えられる。

(2) There 構文において、「前方照応型」・「外界照応型」・「一般知識型」の“定性を持つ NP” (definite NP) が生起可能となるのは、ボリンジャーが指摘するところの「there が何かを(聞き手の)意識にのぼらせる機能を担っている」とする解釈を支持することにより、説明が可能となる。

(3) 結果、最初に問題提起した DR の本質について、それをコントロー



ルする最重要要因は規範文法や伝統文法にいう“形”の「定性」にあるのではなく、機能主義的言語観に基づく“意味”の「定性」にあることは明らかである。

#### IV. 結 語

本論考では、存在を表わす *There* 構文を理解するうえで重要な要因に着目し、当該構文の本質を明らかにした。それは *there* の機能を脈絡を重視して理解するということと、*There* 構文形成にとって中心的課題となる統語制約としての「定性制約」(DR) を焦点化して、DR の本質とは何か、さらには DR を働かせる心理的原理とはどのようなものかについて、機能主義的アプローチによりその解明を試みたということである。

そもそも、*There* 構文をめぐる先行研究のなかで、主として引用されるのはポリンジャーとミルサークだが、前者が形式主義にとらわれずに意味を重視した機能主義的言語観を展開するのは対照的に、後者はあくまでも形式主義に則り、その定式化に際して新規の条件付けを提案する。また、ミルサークが DR の本質とは何かを考察する際に「定性」をめぐる UR という新たな視点を提示する一方で、ポリンジャーは DR を働かせる心理的原理に関して極めて有益な示唆を供与するところに特徴がある。第 II 節においては、意味重視の機能主義的立場の萌芽的研究としてカームに言及し、その他、ランドー&ナポリ、ホルムバック、鈴木や高見にも言及した。ランドー&ナポリの示した前方照応型の NP を伴う *There* 構文を排除する言語的洞察は、鈴木でも同様の結論が導かれてはいるものの、第 III 節で提示した言語データの質的分析からは支持できないうえに、ホルムバックの「包括性」という概念もまた、結果的にはポリンジャーの骨太の言語的洞察を語用論の立場から別の術語で表現したものに過ぎないと判断される。

そこで、本論考では 4 つのジャンルにわたって実際の言語データを蒐集し、その言語事実から *There* 構文に共起する“定性をもつ NP” (definite NP) を類型化し、*There* 構文に働く DR の特性を明らかにした。DR の性質に特化するというアプローチを採用したため、荒木・安井 (1992) に基づき、「リスト文」は「提示文」の典型例として統計から除外したが [eg. 'Well then, I can not think [who else would have a chance of making

horrible things happen at Hogwarts|,' said Harry. 'I mean, there's Dumbledore.' (Fiction: ② HP, p. 18))、別の立場から、There 構文も「単純判断で、文全体が新情報を伝える提示文」の一つとして大括りでとらえる可能性は必ずしも否定できない。例えば、池上嘉彦の提唱する「相同性」(homology) のような概念を There 構文に持ち込めば、新たな展開が可能となるかもしれない。事実、安藤 (2005) は There 構文 (eg. *There's a car blocking my way.*) を「提示文」の一つとして取り扱う [§. 36.4.2]。また、本稿で言及したボリンジャー (1977) も *there* のもつ提示的機能に着目して There 構文の解釈を試みていることは確かである。しかし、本分析においては、There 構文を“ある話題 (topic) について何かの評言を行なう、すなわち、旧情報と新情報からなる”「叙述文」として扱ったことを改めて指摘しておく。

また、DR の性質に特化するという同じ理由から、ミルサークが修正導入した「全称性制約」(UR) についても考慮外においた。今回採集した言語データのなかにも “There is every chance it will become a fashion accessory, ... [GW, no.15, p. 22]; There are all kinds of courage [① HP, p. 221]; I would be wildly surprised to learn that there is any intensive cattle raising or agricultural business in such area [GW, no.13, p. 14]” などの事例は見受けられたが、いずれも “universal use” とは明確に判断できないものであったからである。言語データ分析の結果、ミルサークが“強い定性要因”として一括りにする「限定」を表わす定冠詞・指示詞・代名詞・所有格固有名詞については、実は“形”としての「定性」に従って分類されているものに過ぎず、DR が働いてそれらがすべて一律に排除されるわけではないことがわかる。当該限定表現が使用される脈絡において“意味”が「不定」ならば、すなわち、どれほど既知の情報であっても、当該脈絡における聞き手にとって初めて取得した(気づいた)情報ならば、「後方照応型」であれ「前方照応型」であれ、正規に使用されるということを言語事実が語っている。その情報を送り出す話し手としては、新情報を担うレーマとして There 構文 (この場合は There + be + Definite NP + locative) を使うが、その場合の *there* には“何かを(聞き手の)意識にのぼらせる機能が備わっている”とするボリンジャーの透徹した至言に、存在を表わす There 構文の本質が見事に凝縮されており、それは支持するに足る十分な説得力をもつ。

結局、上述のような *there* の機能主義的説明を十分に理解することによって、存在を表わす *There* 構文の本質を端的に表現すると、「何かを気づかせる有標形の言語形式」（「気づきのための機能的手段）」ということになり、後続する「真主語」NP 位置には「新情報」の担い手のみが共起可能となる。ただし、その場合の「新情報」という概念は、客観的新情報ということの意味するのではなく、主観的新情報、すなわち、言語表現の当事者間にとっての新情報ということの意味する。従って、伝統文法や形式文法が表層的に規定する *DR* は厳密な意味では存在しないという結論が導かれることは言を俟たない。本論考により、人口に膾炙する *DR* に関する誤謬を正すことができたとすれば所期の目的は達せられたことになる。

## 註

※本稿は、日本英文学会中部支部第60回大会（信州大学，2008.10.19）において口頭発表した「*There* 存在構文の定性制約に関する機能主義的分析」に加筆・修正を施したものである。司会を務めて下さった都築雅子・中京大学教授と、貴重なコメントを頂戴した安武知子・愛知教育大学教授と加藤勉三・信州大学教授に改めて謝意を表す。

- 1) *There* 構文の *there* の場合、その動詞は後続の名詞句の数と一致するという点から、*It* 構文の場合の *it* と同列に論じるのは適当ではないとイエスベルセンは指摘する [Jespersen 1949: §3.1<sub>1</sub>].

情報構造という観点からチェイフ (Wallace Chafe) に依拠すれば、マテジウス (Vilém Mathesius) が定義するところの旧情報に相当する概念を“テーマ (theme)」、新情報には“レーマ (rheme)”という術語を使用して、*There* 構文を説明することができる。次の例では、斜体部分がレーマ、囲み部分がテーマである。

What is on the table?

Where is the cup?

There is a cup on the table.

It The cup is *on the table*.

- 2) 「リスト文」(list sentence) は、例えば “How many can we get for our group?—Well, *there's John, and Mary, and Bill*” のように、個々の項目は既知であっても、どんな項目がリストに入るかは聞き手にとって不明なのである。つまり、聞き手にとって未知の情報を担うものとして談話の場面に導入される限り、*There* 構文で用いることができる [安藤 2005: 764].
- 3) いわゆる「リスト文」(list sentence) は、典型的な「提示文」(presentational sentence) の性質を備え、post-verbal NP に使われる固有名詞や定冠詞附 NP は聞き手にとっては新情報であり、機能的には *DR* の及ぶ「定

扱いは不適當であると考えられる [荒木・安井 1992: 821-822]。

- 4) 1959年に Randolph Quirk が London 大学で開始した Survey of English Usage (SEU) がカード式の言語コーパス編纂の端緒であり、コーパス言語学の黎明である。実際の電子コーパスは、アメリカ英語の書き言葉100万語で構成される Brown Corpus (the Standard Corpus of Present-Day Edited American English, 1961) と、イギリス英語の書き言葉100万語で構成される LOB Corpus (Lancaster-Oslo/Bergen Corpus, 1978) の開発により本格的に始まったといえる。1990年代に入ると、データベースの大規模化が進み、British National Corpus (BNC) や Bank of English (BoE) のように、話し言葉も含めたものに発展し、辞書や文法書の編纂に貢献している。BNCはOxford U. P.を主幹とする6機関の共同プロジェクトで1994年に完成。イギリス英語の書き言葉9,000万語と話し言葉1,000万語を含む総語数1億語の品詞タグ付きコーパス。一方、BoEはHarper Collins社とBirmingham大学の共同プロジェクトで1995年には当初の目標2億語を達成し、現在は5億語を超える。資料の約70%がイギリス英語、約25%がアメリカ英語、残りの約5%がオーストラリア英語やカナダ英語。これは monitor corpus の役割を担い、COBUILD系の辞書や文法書の編纂に活用されている。
- 5) 口語表現の場合に、*There's* という縮約形が多用され、それに真主語の名詞句が後続する傾向があることから、厳密な意味での存在を表わす *There* 構文ではなく、談話指標 (discourse marker) として使用されているのではないかとの推量が成立する。しかし、映画のセリフや新聞論説を精査した三原 (2005) に拠ると、「口語表現である *there's* に限ったことではないかという予想に反し、*there is*、*there was* でも検出された」[三原 2005: 161] という指摘があるので、当該言語現象の解釈はそれほど一面的にはいかないことに留意が必要である。

### 参考文献

- 荒木一雄・安井 稔(編)(1992)『現代英文法辞典』東京：三省堂。  
 有坂颯二 (2006) 「存在意味」と日本語の数量詞の強弱について『言葉の絆——藤原保明博士還暦記念論文集』3-16。東京：開拓社。  
 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』東京：開拓社。  
 Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S. & Finegan, E. (1999)  
*Longman Grammar of Spoken and Written English*. Essex: Pearson Education Lt.  
 Bolinger, D. (1972) *That's That*. Janua Linguarum Series Minor 155. The

- Hague: Mouton.
- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. London: Longman. [中右 実(訳) (1981)『意味と形』東京: こびあん書房.]
- Breivik, L. G. (1981) On the Interpretation of Existential *THERE*, *Language* 57: 1, 1-25.
- Breivik, L. G. (1983) *Existential THERE: a Synchronic and Diachronic Study*. Bergen: University of Bergen.
- Chafe, W. L. (1970) *Meaning and the Structure of Language*. Chicago: Univ. of Chicago Pr. [青木晴夫(訳)(1974)『意味と言語構造』東京: 大修館書店.]
- Curme, G. O. (1931) *Syntax, A Grammar of the English Language II*. Boston: Heath & Co.
- Declerk, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha Co. Lt.
- 藤原保明 (2001) チョーサーの存在文『言語文化論集』57: 1-14. 筑波: 筑波大学.
- Holmback, H. (1984) An Interpretive Solution to the Definiteness Effect Problem, *Linguistic Analysis* 13:3, 195-215.
- 今井邦彦(編)(1992<sup>a</sup>)『チョムスキー小事典』東京: 大修館書店.
- Jespersen, O. (1924) *The Philosophy of Grammar*. London: George Allen & Unwin. [半田一郎(訳)(1958)『文法の原理』東京: 岩波書店.]
- Jespersen, O. (1933) *Essentials of English Grammar*. London: George Allen & Unwin. [中島文雄(訳)(1963)『英文法エッセンシャルズ』東京: 千城.]
- Jespersen, O. (1949) *A Modern English Grammar on Historical Principles VII*. London: George Allen & Unwin.
- 亀井聖子 (1987) There 構文と新情報 *CLARITAS* 3, 31-45. 刈谷: 愛知教育大学.
- Kruisingha, E. (1931-32<sup>b</sup>) *A Handbook of Present-Day English*. 4 vols. Groningen: Noordhoff.
- 黒川泰男 (1986)『英文法再発見(上)』東京: 三友社出版.
- Mathesius, V. (1975) *A Functional Analysis of Present-Day English on a General Linguistic Basis*, trans. L. Dušková, ed. J. Vachek. The Hague: Mouton. [飯島 周(訳)(1981)『機能言語学』東京: 桐原書店.]
- 三原 京 (2005) 多様なコンテクストにおける there 構文について『テキスト研究』2: 149-166.
- Milsark, G. L. (1977) Toward an Explanation of Certain Peculiarities of the Existential Construction in English, *Linguistic Analysis* 3:1,1-29 [the author's name is misprinted as Milwark.]

- Milsark, G. L. (1979) *Existential Sentences in English*. New York & London: Garland Publishing Inc. [orig. the author's Ph.D thesis submitted to MIT, 1974.]
- Mitchell, B. (1985) *Old English Syntax*. 2 vols. Oxford: Clarendon.
- 村田勇三郎 (1982) 『機能英文法』東京：大修館書店。
- 中尾俊夫・児馬 修(編著) (1990) 『歴史的にさぐる 現代の英文法』東京：大修館書店。
- Namiki, T. (竝木崇康) (1973) English Existential Sentences with Definite Subjects, *Studies in English Linguistics* 2, 126-135.
- Quirk, R. (1951) Expletive or Existential There. In F. Norman, G. Kane & A. H. Smith (eds.), *London Medieval Studies* 2:1, 32.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. & Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Rando, E. & Napoli D. J. (1978) Definites in There-Sentences, *Language* 54: 2, 300-313.
- 鈴木英一 (1977) 存在文の意味上の主語と定性・不定性『山形大学紀要(人文科学)』8: 4, 81-106.
- Takami, K. (高見健一) (1992) On the Definiteness Effect in Extraposition from NP, *Linguistic Analysis* 22: 1-2, 100-116.
- Ungerer, F. & Schmid, H.-J. (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London: Longman. [池上嘉彦(監訳) (1998) 『認知言語学入門』東京：大修館書店。]
- 安井 稔 (1978) 『新しい聞き手の文法』東京：大修館書店。

#### Appendix : 言語資料〈引用データの出典一覧〉

- Harry Potter and the Chamber of Secrets*, J. K. Rowling, London: Bloomsbury, 1998.
- Harry Potter and the Philosopher's Stone*, J. K. Rowling, London: Bloomsbury, 1997.
- Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, J. K. Rowling, London: Bloomsbury, 1999.
- Larry King Live*, CNN television, July 24-September 3, 2004: script from <http://transcripts.cnn.com/TRANSCRIPTS/lkl.html>.
- Lord of the Flies*, W. Golding, New York: Aeonian Press Inc., rept., 1975 (orig., 1954).
- The Guardian Weekly*, vol.171 nos.12-16, Manchester, Guardian Publica-

- tions, 2004.
- Critical Period of General Age Factor(s)?, D. Singleton, *Age and the Acquisition of English as a Foreign Language*, eds. M. García Mayo & M. García Lecumberri, 2003.
- Critical Period Effects in Second Language Learning, J. S. Johnson & E. L. Newport, *Cognitive Psychology* 21, 1989.
- The Robustness of Critical Period Effects in Second Language Acquisition, R. M. DeKeyser, *Studies in Second Language Acquisition* 22, 2000.
- Confounded Age: Linguistic and Cognitive Factors in Age Differences for Second Language Acquisition, E. Bialystok & K. Hakuta, *Second Language Acquisition and the Critical Period Hypothesis*, ed. D. Birdsong, 1999.
- Can Late Starters Attain a Native Accent in a Foreign Language? A Test of the Critical Period Hypothesis, Th. Bongaerts, B. Planken & E. Schils, *The Age Factor in Second Language Acquisition*, eds., D. Singleton & Z. Lengyel, 1995.
- Three Misconceptions about Age and L2 Learning, S. H. Marinova-Todd, D. B. Marshall & C. E. Show, *TESOL Quarterly* 34, 2000.
- Age, Length of Exposures and Grammaticality Judgements in the Acquisition of English as a Foreign Language, M. P. García Mayo, *Age and the Acquisition of English as a Foreign Language*, eds. M. García Mayo & M. García Lecumberri, 2003.
- Introduction: Whys and Why Nots of the CPH for Second Language Acquisition, *Second Language Acquisition and the Critical Period Hypothesis*, ed. D. Birdsong, 1999.